資 料 ３

学校適正配置の必要性

１　「学校の規模」の考え方

（１）千葉市

千葉市学校適正配置実施方針で定めた学校の規模を整理すると、次のとおりです。

<table>
<tr><th></th><th colspan="2">小学校</th><th colspan="2">中学校</th></tr>
<tr><td rowspan="4">小規模校
１～１１
学級</td><td rowspan="2">１～５学級
複式学級あり</td><td rowspan="4">クラス替えのできない学年がある。</td><td>１～２学級
複式学級あり</td><td rowspan="2">・クラス替えのできない学年がある。
・全教科に教員が配置できない。
・免許外教科の担当</td></tr>
<tr><td>３～５学級
各学年１～２学級</td></tr>
<tr><td rowspan="2">６～１１学級
各学年１～２学級</td><td>６～９学級
各学年２～３学級</td><td>・各学年でクラス替えが可能である。
・４教科（音、美、技・家、保体）で教員が足りない場合がある。
・免許外教科の担当</td></tr>
<tr><td>１０～１１学級
各学年３～４学級</td><td>・各学年でクラス替えが可能である。
・全教科で教員の配置がほぼ可能である。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">適正規模校
１２学級～
２４学級</td><td>１２～１８学級
各学年２～３学級</td><td rowspan="2">・各学年でクラス替えが可能である。
・専科教員が配置できる。（１３学級以上）
・校務分掌に負担が少ない。</td><td>１２～１８学級
各学年４～６学級</td><td rowspan="2">・各学年でクラス替えが可能である。
・全教科で教員の配置が可能である。
・校務分掌に負担が少ない。
・ニーズに応じた部活動が可能である。</td></tr>
<tr><td>１９～２４学級
各学年３～４学級</td><td>１９～２４学級
各学年６～８学級</td></tr>
<tr><td>大規模校
２５学級～</td><td colspan="2">学年によっては４学級以上となる。</td><td colspan="2">学年によっては８学級以上となる。</td></tr>
</table>

※複式学級：小学校では、複数学年で１６人以下（小学１年を含む場合８人以下）
中学校では、複数学年で８人以下
［公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律第３条］

２　より良い教育環境の整備

各学校では、それぞれの学校規模によるメリットを生かしつつ、デメリットを補うよう、最大限の努力をしていますが、**多様な教育活動を展開し、子どもたちが豊かな人間関係を築き、社会性を身につけていくようにするためには、小さなグループから大きなグループまで、場面に応じて適切な規模の集団を組むことが必要です。**そこで、次の点について考慮し、より良い教育環境を整備するために学校規模の適正化を図る必要があります。

（１）人間関係面

ア　子どもたち同士が豊かな人間関係を築くことができること。
イ　子どもたちが集団の中での適切な行動を身につけ、社会性を養うことができること。
ウ　クラス替え等により、人間関係の固定化を防ぐことができること。

（２）教育指導面

ア　大きな集団での学習活動や小グループでの学習活動など、様々な学習形態に対応でき、個に応じたきめ細かな指導と集団の相互作用を生かした指導の両方が可能であること。
イ　施設、特別教室、教材・教具等の使用に支障をきたさないこと。
ウ　中学校において、子どもたちのニーズに応じた部活動数を確保することができること。

（３）学校運営面

ア　小学校では専科教員を配置することができ、中学校では全教科に教員を配置して免許外の教科を担当する教員を置かないようにすること。
イ　教員同士が互いに切磋琢磨でき、校務分掌の運営に大きな負担を生じないこと。

⇩

千葉市における学校の適正規模　（千葉市学校適正配置実施方針ｐ．２）

	小学校	中学校
１校あたり	１２学級以上２４学級以下	１２学級以上２４学級以下

３　学校規模によるメリットとデメリット

学校規模によるメリットとデメリットをまとめてみると、次のとおりになります。

（１）小規模校（１１学級以下）

～学級数の少なさから見た場合～

	メリット	デメリット
人間関係面	○子ども同士、お互いが顔なじみで、校内ではまとまりやすく、仲間の性格をよく理解し、生活することができる。 ○ほとんどの教員が、すべての子どもたちと関わることができ、アットホームで和やかな雰囲気の環境ができる。	○クラス替えができず、入学から卒業まで同一集団で過ごすため、 ・子どもたち同士のかかわりや競い合いの機会が限られる。 ・子ども同士、保護者同士の人間関係や評価が固定化しやすく、いったん人間関係がこじれると、修復が難しい。
教育指導面	○運動会や各種発表会などの行事で、子どもたちがそれぞれ何らかの役割を分担し、ひとりあたりの出場・出演回数も多いので、行事への参加意識が高まる。 ○運動場・体育館・プールなどの施設、理科教室や音楽室などの特別教室の活用、及び運動用具・教材・教具の利用が十分にできる。	○行事は、全体として盛りあがりにかける。高学年は、準備・出場・後片付けと忙しく負担が大きい。また、集団演技や団体競技もできにくい。合奏・合唱の編成規模や劇等の出演者数も縮小せざるを得ない。 ○中学校において、部活動数に限りがあり、子どもたちが希望する部活動の設置や運営が難しい。
学校運営面	○教職員間での意思の疎通が図られやすく、方針等がまとまりやすい。 ○行事の運営で小回りが利くため、多様な活動が計画できる。	○小学校では、専科教員を配置できない。中学校では、担当一人で全学年を教えたり免許外の教科を担当するケースがある。 ○教職員一人あたりの校務分掌の数が多くなり、負担が大きい。出張等で学校を離れて行う業務に対応できないことがある。学年・教科運営を若手であっても一人に任せるしかなく、教職員同士の相談や切磋琢磨ができない。

～学級の人数の少なさから見た場合～

	メリット	デメリット
人間関係面	○仲間の性格をよく理解し、生活することができる。 ○アットホームで和やかな雰囲気の環境ができる。	○先生の眼のゆきとどいた生活に慣れてしまい、多人数の集団に加わって行動しなければならない場面で、内弁慶になりがちである。
教育指導面	○時間をかけた丁寧な指導ができ、子どもたちの発表の機会が多くなる。 （算数の九九やたて笛の指導など、くり返し練習する学習には有効である。） ○集団としてまとまりやすい。	○教師への依存度が強くなり、学習等への取り組みが受身になりがちである。また、多様な意見を取り入れて自分の考えを深める学習ができにくく、得意な子どもの考え方に全体が引っぱられやすい。 ○いくつかの班に分けて学び合う活動は、学習班の数に限りがあるので、他の班との比較があまりできない。 ○体育では、サッカーなどの集団ゲームがミニゲームにならざるを得ず、チーム数が少なく、相手も同じなので意欲をなくしがちである。また、音楽でも、多人数による大合奏が難しい。